

2. 臨床実習について

—平成4年～平成6年における保存修復学臨床相互実習に関する検討—

小林 俊介, 荊木 裕司, 平本 正樹, 野田 晃宏
尾立 達治, 大沼 修一, 横内 厚雄, 山本 淳子
長岡 央, 原口 克博, 川上 智史, 松田 浩一
(歯科保存学第二)

保存修復学臨床実習ではP C T システムを用いたシミュレーション, 相互実習, 診療見学, 介助, 医員診療の部分担当などによる実習教育をおこなっている。我々はこれまで, より効果的で効率の高い教育をめざして, 毎年実施されている実習内容を調査し, 問題点とその改善策について検討し, 次年度の実習内容に反映させている。

平成6年には病院体制の変更により, 新たに臨床実習の場として学生専用の診療室が設置された。この結果, 保存修復学臨床実習においても, 特に相互実習について前年とは異なった指導方法を採用することとなった。そこで今回は平成6年の相互実習内容について過去2年間と比較し検討した。

結果と考察

平成6年の保存修復学相互実習総終了ケース数は155ケース(鑄造修復49ケース, 成形修復106ケース)と過去2年間のケース数と比較して約1.5倍に増加した。ケース

の内容(修復物の種類, 窩洞別の割合)については特に変化は無かった。学生専用の実習室におけるユニットの稼働率3～8月の相互実習期間では平均16.9%, 学生一人当たり延べユニット使用時間は15時間であった。月別のユニット稼働率では3月, 4月の相互実習開始時期に低く, 後半の実習終了間近になる7月に高くなる傾向が認められた。また, 曜日別の稼働率でも同様に週のはじめの月曜が最も低く, (12%) 週末の金曜に最も高まる(35%) 傾向が認められた。平成5年までは相互実習は保存科外来において一般患者の診療と同じ場所で実施されていたため, 診療時間, 回数が制限され, 十分な診療実習を行えないという, 点が指摘されていたが, 今回の専用の実習室の設置に伴い, 学生のケース数もかなり増大したことから, この点については改善がなされたと考えられる。今後は, より効率的な実習室の運用による教育の質の向上について検討する所存である。

3. 歯科衛生士教育における授業計画

西田 俊子, 澤邊千恵子, 今野 妙子
小田島千郁子
(歯科衛生士専門学校)

I. 目的

歯科衛生士専門学校点検評価分科会の一提言事項として, 授業計画の公表があり平成6年度より学生および担当教員, 実習指導者に配布している。授業計画発刊後約9ヵ月経過した現時点での活用法や問題点を具体化し, 今後の改善を目的に学生と教員とそれぞれ調査を実施した。

II. 調査方法

1学年55名に無記名によりアンケートを実施し回収率は100%だった。

科目担当教員に対しては36科目, 44名を対象に個々に聞き取り調査を行った。

III. 結果

授業計画の利用状況は学生の75%が, 試験前の学習, 授業の時, 気が向いた時, 予習・復習の順で活用していた。一方, 活用していない学生は25%で, 主な理由は活用法が分からないという回答であった。利用している科目では, 全体の8割の学生が歯科衛生士教員担当の授業である予防処置・診療補助・保健指導と回答し, 次いで栄養指導, 歯科衛生士概論, 口腔衛生学の順であった。整理・保管法では38%の学生が1冊のままで保管し, 62%は特定の科目のみ切り離して実習帳やノートにファイルしたり, 基礎系科目・臨床系科目・その他として整理していた。教員の約9割は授業計画は必要であると回答しながらも, 主な改善点として, 発刊目的の記載, 学生からの要望を聞く, 項目に対する記載内容が多すぎる, そ